

表 2

カード No.2

外表奇形等調査表

施設名

施設番号		分娩年月	妊娠週数	母体年齢	初産別	児の体重	性別	児の数	出産児の状況	発見時期	生後経過	別棟
1	2	7	11	13	1	16	1	1	1	1	0	ナシ
(注1) 出産前の場合、発見時の週数を記入してください。 (注2) 出産後24時間以内は“0”日として記入してください。 (注3) 24時間以内の死亡は“0”日として記入してください。												
※記入しないでください ※受付番号 平 SQ-NC 29 31 34												
項	頭		顔		口唇・口蓋・口腔		耳		眼		鼻	
	多指	多趾	多乳	多爪	短頸	短頸	小耳	大耳	耳介	耳介	眼瞼	小眼
目	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼	眼瞼
C	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
骨 部 胸 部 外 陰 ・ 会 陰 気 管 ・ 消 化 管 症 候 群 二 重 性 (複 合 奇 形) 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110												
外表奇形の項目の該当するC欄に“1”または“/”を記入して下さい。 なお2つ以上記入された場合は必ず多発奇形(複合奇形)の欄に“1”または“/”を記入して下さい。 <コメント> 1 この調査は、妊娠満24週以降の分娩において、生後1週間までに発見された奇形児について報告して下さい。 2 記入には、鉛筆又は黒ボールペンで記入し、訂正時には、新しい調査表をご使用下さい。 3 この奇形分類内容にないときは、略図又は写真を加えて下さい。												

社団法人 日本母性保護医学会

調 査 結 果

1. 調査状況

昭和61年1月1日より12月31日までの調査状況は表3に示す通りである。

表 3 調 査 状 況

届出施設数	273
奇形児総数	1,479
奇形総数	2,028
分娩総数	157,584
出産児総数	159,081
奇形児出産頻度(%)	0.93

2. 暦月別奇形児出産頻度

暦月別奇形児出産頻度は表4に示す如くで、罹患率は6月が1.149%と最も高く、次いで7月0.993%、4月0.976%、5月0.96%の順で12月が最も低く0.754%であった。

3. 母親の年齢別奇形児出産頻度

母親の年齢別奇形児出産頻度は表5に示す如くで、40歳以上が罹患率2.29%と異常に高値で、次いで19歳以下が1.38%と高率を示し、25~29歳が0.86%ともっとも低率を示し、その他の年齢層では0.9%台で相違はみられていない。

表 4 歴月別奇形児出産頻度

暦月	分娩数	出産児数	奇形児数	奇形数	罹患率(%)
1月	14,240	14,369	124	164	0.863
2月	12,802	12,932	110	167	0.851
3月	13,624	13,732	122	164	0.888
4月	12,894	13,010	137	167	0.976
5月	13,621	13,749	132	179	0.960
6月	13,442	13,579	156	230	1.149
7月	14,461	14,606	145	206	0.993
8月	13,432	13,575	131	162	0.965
9月	12,949	13,075	122	163	0.933
10月	12,933	13,067	116	168	0.888
11月	11,226	11,320	103	147	0.910
12月	11,960	12,067	91	111	0.754
合計	157,584	159,081	1,479	2,028	0.930

(A)

(B)

(100B/A)

表 5 母親の年齢別奇形児出産頻度

年齢	分娩数	奇形児数	奇形数	罹患率(%)
19歳以下	1,447	20	34	1.382
20～24	22,630	225	302	0.994
25～29	73,964	638	883	0.861
30～34	45,535	441	591	0.968
35～39	13,129	128	176	0.975
40歳以上	1,179	27	42	2.290
合計	157,584	1,479	2,028	0.939

(A)

(B)

(100B/A)

4. 妊娠週数別奇形児出産数・率

妊娠週数別奇形児出産数及び率は表6に示すとおりで分娩予定日前の39週が20.08%と最も多く、次いで40週の18.46%、38週の14.47%の順で正常児の分娩週数の分布と差異は認められない。

5. 初産・経産別奇形児出産数・率

初産・経産別奇形児出産数・率は表7に示す如くで、罹患率は初産0.976%、経産0.904%と両者に差異は認められない。

6. 奇形児の性別

奇形児の性別は表8に示す如く男0.989%、女0.841%と男児に多くみられた。

7. 奇形児の出産時の状態

奇形児の出産時の状態は表9に示すごとくで死産15.2%、仮死(死亡)3.4%と18.6%が死亡している。

表 6 妊娠週数別奇形児出産数・率

週 数	奇形児数	率(%)	週 数	奇形児数	率(%)
24 週	9	0.609	36 週	62	4.192
25 週	15	1.014	37 週	128	8.654
26 週	12	0.811	38 週	214	14.469
27 週	13	0.879	39 週	297	20.081
28 週	24	1.623	40 週	273	18.458
29 週	21	1.420	41 週	133	8.993
30 週	26	1.758	42 週	25	1.690
31 週	31	2.096	43 週	5	0.338
32 週	38	2.569	44 週	0	0.000
33 週	38	2.569	45週以上	1	0.068
34 週	47	3.178	無 記 入	0	0.000
35 週	67	4.530	合 計	1,479	100.000

表 7 初産・経産別奇形児出産数・率

区 分	分 娩 数	奇形児数	奇 形 数	罹患率(%)
初 産	72,922	712	966	0.976
経 産	84,653	765	1,060	0.904
不 明	9	2	2	22.222
無 記 入	0	0	0	0.000
合 計	157,584	1,479	2,028	0.939

(A) (B) (100B/A)

表 8 奇形児の性別

区 分	出 産 児 数	奇 形 児 数	罹患率(%)
男	81,893	810	0.989
女	77,148	649	0.841
不 明	40	20	50.000
無 記 入	0	0	0.930
合 計	159,081	1,479	0.930

(A) (B) (100B/A)

表 9 奇形児の出産時の状態

区 分	奇形児数	率(%)
生 産	1,090	73.698
仮死(蘇生)	113	7.640
仮死(死亡)	51	3.448
死 産	225	15.213
無 記 入	0	0.000
合 計	1,479	100.000

8. 奇形児体重別出産頻度

奇形児体重別出産頻度は表10に示す如くで、2,496g以下のいわゆる低出生体重児の占める割合は33.9%と高率を示し、正常児で低出生体重児の占める率(約6%)の5.6倍にも達している。

表 10 奇形児体重別出産頻度

体 重	奇 形 児 数	率(%)
1,000g未満	97	6.558
1,000～1,499	105	7.099
1,500～1,999	119	8.046
2,000～2,499	181	12.238
2,500～2,999	392	26.504
3,000～3,499	414	27.992
3,500～3,999	144	9.736
4,000g以上	26	1.758
無 記 入	1	0.068
合 計	1,479	100.000

9. 奇形児発見時期別出産頻度

奇形児発見時期別出産頻度は表11に示す如くで、妊娠中に発見しているものが21.1%、出産時59.1%、出産後19.9%であった。

表 11 奇形児発見時期別出産頻度

区 分	奇 形 児 数	率(%)
妊 娠 中	311	21.028
出 産 時	874	59.094
出 産 後	294	19.878
無 記 入	0	0.000
合 計	1,479	100.000

10. 奇形種類別発生順位発生数

奇形種類別発生順位、発生数は表12に示す如くで、昭和60年の順位と比べると1昨年1位であった無脳症が3位に、7位であったダウン症候群が4位に上昇しているが、他の疾患で急増したり急減したりしたものはみられていない。

考 按

昭和61年の全国の出生数は1,438,000人と云われ、われわれの調査対象は159,081人であるから全出生児の11%をカバーしている。

奇形児数は1,479名で奇形児出産頻度は0.93%でこの頻度は有意ではないが過去年15間で最も高い率である。

表 12 奇形種類別発生順位, 発生数

順位	奇形の種類	奇形数	順位	奇形の種類	奇形数	順位	奇形の種類	奇形数
(1)	口唇・口蓋裂	147	(26)	腹壁破裂	21	(48)	鼻孔異所開存	3
(2)	多指症	128	(27)	鼻の変形	17	(48)	心脱出症	3
(3)	無脳症	116	(28)	小耳症	16	(48)	肛門異所開存	3
(4)	ダウン症候群	102	(29)	耳介欠損	12	(48)	二葉陰のう	3
(5)	合趾症	88	(30)	欠趾症	10	(48)	膀胱外反症	3
(6)	口唇裂	87	(30)	小眼球症	10	(48)	直腸閉鎖	3
(7)	水頭症	83	(30)	軟骨發育不全症	10	(48)	二重体(重複奇形)	3
(8)	口蓋裂	82	(30)	陰核肥大	10	(58)	巨舌症	2
(9)	鎖肛	81	(34)	脊髄彎曲	8	(58)	眼瞼欠損	2
(10)	多趾症	78	(35)	爪欠損	7	(58)	猿頭症	2
(11)	耳介低位	62	(35)	単眼症	7	(58)	胸筋欠損	2
(12)	耳介変形	51	(35)	無眼球症(右)	7	(58)	肋骨欠損	2
(13)	髄膜瘤	46	(35)	頭皮欠損	7	(58)	肛門狭窄	2
(14)	臍帯ヘルニア	45	(35)	瘻孔	7	(64)	顔面裂	1
(15)	合指症	44	(40)	鎖陰	6	(64)	大耳症	1
(16)	尿道下裂	41	(40)	尿道閉鎖	6	(64)	虹彩欠損	1
(17)	欠指症	39	(40)	先天性 (多発性関節拘縮症)	6	(64)	頭蓋骨癒合症	1
(18)	下顎形成不全(小顎症)	34	(43)	欠損(上肢)	5	(64)	頸部瘻孔	1
(19)	短肢症(上肢)	25	(43)	裂手症	5	(64)	ピロニダル ジーヌス	1
(19)	外耳道閉鎖症	25	(43)	無眼球症(左)	5	(64)	胸骨破裂	1
(21)	小頭症	24	(46)	気管食道瘻	4	(64)	食道狭窄	1
(21)	脳ヘルニア(脳膜瘤)	24	(46)	直腸狭窄	4	(64)	先天性(絞扼輪症候群)	1
(23)	耳瘻孔	23	(48)	欠損(下肢)	3	(64)	アベルト症候群	1
(23)	食道閉鎖	23	(48)	フオコメリア	3	(74)	その他	266
(25)	短肢症(下肢)	22	(48)	裂足症	3			

母親の年齢別奇形児出産頻度は40歳以上の母親では2.29%と他の年齢層に比べ有意水準5%で有意の差を示している。

妊娠週数別奇形児出産数・率は正常児のそれと差異は認められない。

初産、経産別の奇形児出産率はほぼ同率を示している。

奇形児の性別は男児が女児に比べて多くみられている。

奇形児の出産児の状態は死産が15.2%、仮死で生れ死亡したもの3.4%と18.6%が死亡している。

奇形児の体重別出産頻度は、2,499g以下の低出生体重児が33.9%と多く、正常児のその5.6倍に達し、奇形児では低出生体重児が多いことを示している。

奇形児の発見時期は超音波診断装置の発達、普及に伴ない、妊娠中に発見される率が高くなり特に無脳症、脳瘤、水頭症等の中樞神経系の奇形は妊娠20週~30週の頃に発見される率が高まりつつある。従って24週以後の分娩を対象にしている我々のモニタリングがこれら疾患の発生数を正しく把握していないことが考えられ今後検討を要する課題と思われる。

奇形種類別発生順位・発生数をみると前年1位であった無脳症が3位になり観察値/期待値も

1.0から0.8に減少している。これが24週未満の診断と関係があるかどうか更に検討が必要である。ダウン症候群が前年の7位から4位に上昇しており、観察値/期待値は1.0から1.3に上昇している。この値が直ちに発生数の異常増加と云えるかどうか更に分析する必要がある。その他の疾患の順位および発生数は例年とはほぼ同様である。

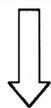
お わ り に

日母では、昭和47年より全国会員の協力を得てホスピタルベースで外表奇形等調査を行っている。この調査は暦年を単位としてまとめているので、厚生省班研究報告とは多少ずれるが、日母の形式に従って昭和61年1月1日より12月31日迄の成績をまとめた。

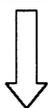
[本調査に御協力いただいた日母会員に深謝する。]

文 献

- 1) 住吉好雄, 野嶽幸正, 桑原慶紀, 皆川 進, 野末源一, 斎藤 幹, 五味淵政人, 森山 豊;
日本母性保護医協会の外表奇形等調査の統計, 産婦人科の世界, 37, (1), 35~43, 1985
- 2) 住吉好雄, 佐藤孝道, 安村鉄雄, 皆川 進, 本多 洋, 古谷 博, 森山 豊; 日本母性保護
医協会外表奇形等調査の現況, 産婦人科治療, 52, (2), 159~167, 1986



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

日本母性保護医協会(以後日母と略す)では昭和47年より全国会員の協力を得て、主な外表奇形および生後1週間以内に発見し得る内臓奇形等について、ホスピタルベースの調査を行ってきた。その結果は毎年日本先天異常学会で発表して来た。今回は昭和61年の調査結果を報告する。